かつての下館の風景
～大にぎわいだった「まち」～

和田（わだ） 恵子（けいこ） さん（榎生一丁目）

にぎやかに開催される商工まつりをみると「まち」が原点だと改めて感じます。

みなさんは「まち」という行事をご存知でしょうか。

「まち」は「祭り」の意味で、かつて下館羽黒神社の秋祭りを「下館まち」や「まち」と呼び、そのにぎわいは夏の祇園まつりをしのぐほどでした。

今はその呼び名は姿を消し、イベントの様相も変化しましたが、かつてそう呼んでいた昭和30年代ごろの下館の姿を伝え残したいと思い、下館の歴史に詳しい下館・時の会の一木努（いちきつとむ）代表にお話しを伺いました。

多くの人でにぎわった理由

「旧暦の10月15日が羽黒神社の秋祭りで、ちょうど収穫作業が終わるころ。現金収入を得た近郷の農家の人たちは、一年分の支払いと正月を迎えるための買い物に町を訪れます。肥料商などはお客さんを座敷に上げてごちそうを振る舞い、各商店は道路にまで商品を並べて大売り出し。通りは人々でごった返して、歩くのも大変だったといいます。実はこの〝まち〟が現在の商工まつりの原点なんですよ」と話す一木さん。

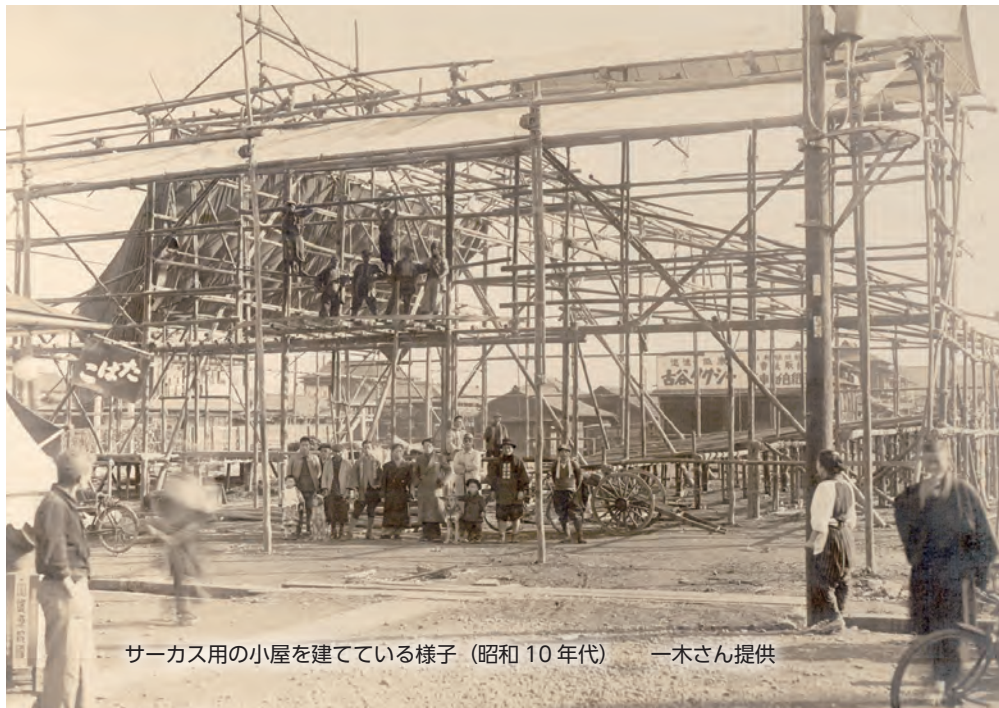
下館・時の会一木代表

サーカスや露店でにぎわう

私が幼いころの「まち」では、羽黒神社前広場や公会堂敷地（現在の筑西しもだて合同庁舎付近）にサーカスや見世物小屋ができ、羽黒坂にも露天商の店が並んでいました。露店で扱われていた品は、べっこう飴、あめ細工、ラムネ、イカ焼き、焼きとうもろこしなどさまざま。特に人気があったのは、子どもたちには、おもちゃ、ヨーヨーすくいや金魚すくい、大人には、呉服、貴金属、金物や日用雑貨品だったようです。私は、動物の形に切られたあめ細工を買ってもらい、飛びはねて大喜びしたことを覚えています。

また、ずらりと並ぶ露店を、今の照明器具では味わえないアセチレン灯（ガス灯）の明るい青白い光が煌々（こうこう）と照らす幻想的なムードは、今でも忘れられません。

さらに、そのころのサーカスの様子を記した書籍には「ゾウを連れてきたサーカス団もあった。レールを人間の腹の上に乗せ、その上をゾウに歩かせて見せた。クマのオートバイ乗り、トラの火の輪くぐり、サルやウマの曲芸、長さ六～七メートルもあるニシキヘビを肩から体に巻き舞台に登場したり……※」とあり、あっとおどろくような光景が人々を魅了していたことがうかがえました。



サーカス用の小屋を建てている様子（昭和10年代）　一木さん提供

取材を終えて

今回取材するなかで、幼かったあのころ、祖父母に手を引かれて羽黒坂を歩いた懐かしい日々が思い出され、胸が熱くなりました。かつての下館の姿が、この令和の時代に、貴重な歴史として少しでも伝え残ってほしいと思います。

※出典：石塚哲次郎「おじさんが子供の頃の下館」平成26年　70ページ